(C)沖縄タイムス社

子への熱意 心育む

第57回 沖縄タイムス教育賞

第57回沖縄タイムス教育賞に、学校現場や地域で優れた研究、実践活動を続ける３氏１団体が選ばれた。受賞者の活動と抱負を紹介する。３月中に開催する予定だった贈呈式・祝賀会は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、延期する。開催日程は、紙面であらためて告知する。

音楽通し生き方伝える 学校教育

工藤かやさん（49） 那覇市立石嶺小学校音楽科教諭



音楽を通し子どもたちと向き合ってきた工藤かやさん＝那覇市立石嶺小学校

モットーは「音楽を通して生き方を伝える」。長年、子どもたちと向き合い感謝の気持ちを大事にする心を伝え続けている。2018年には指導する石嶺小合唱団が全国大会への切符をつかんだ。「指導者としての私がいるのは、子どもたちが私を育ててくれたから」と感謝する。

05年からの3年間、家族と共にローマに渡り専門学校で声楽を学び直した。現地交流を通し、教師としての価値観が変わった。「音を外してもいい。一生懸命が一番」。人前で歌うことに慣れていない子どもに寄り添い、心を開いてくれるまで待つ。

コンクールで成績を残せず悔し涙を流す児童の姿も見てきた。「努力が報われるとは限らない。でも諦めずに立ち向かっていく心を養うことができたはずだ」と確信する。

故郷の福島県を思い、東日本大震災のことを伝えたいと4年前から「群青」を教え子と共に歌う。「これからも子どもたちの声に耳を傾けたい」とほほ笑んだ。

……

くどう・かや　1970年、福島市生まれ。文教大学卒業。98年に那覇市教育委員会採用、一度退職し2009年度に再採用。与儀小や川平小中学校、古蔵小などで教える。14年から石嶺小で音楽教諭を務めている。

確かな実績 創意工夫評価

講評　豊平良孝選考委員長

今年は12件の応募があり、昨年より2件増えた。小中高校やPTA、教育委員会などから推薦されただけあって、いずれも素晴らしい教育者・団体ばかりだった。その中でも特に優れた実践的研究を継続してきた3個人1団体が「沖縄タイムス教育賞」に選ばれた。受賞者には心から敬意を表したい。

今回、学校教育部門で3人が受賞した。石嶺小学校音楽科教諭の工藤かや氏は、音楽、特に合唱を通して人間性、創造性、思いやりやアイデンティティーを指導する能力と資質が感じられるなど、高い評価を得た。各種音楽コンクールで全国大会に出場させた手腕は、保護者や地域の期待に応え、卒業した子どもたちも含めて地域行事に積極的に参加するなど、貢献度と熱意も伝わった。音楽教諭の受賞は14年ぶりとなる。

伊江村立西小学校教頭の玉城睦子氏は「地域にへき地はあってはならない」という信念の下、常に自己研さんに努め、実践活動に創意工夫が見られた。採用当初から継続発行の学級通信を通して親と子どもをつなぐことが意識されている点や子ども主体の工夫を意識している点も非常に良かった。へき地教育では15年ぶりの受賞となる。

伊良波小学校栄養教諭で豊見城市立学校給食センターの根川文枝氏は、県学校栄養士会の会長を長年務め、食育に関する実践講座を開催し、学校のみならず家庭や地域の食育の推進に寄与してきた実績が高く評価された。大学との共同研究を通した豊富な教育実践も素晴らしい内容であった。栄養教諭の受賞は10年ぶりとなる。

社会教育部門でうるま市の津堅小中学校のPTCAが受賞した。学校と保護者、地域が一体となって児童・生徒のために島を挙げて協力している様子がうかがえた。大人との交流を通して風習や芸能を学び、島に対するアイデンティティーの醸成にも役立っている点が評価された。「子は宝」という言葉を実践する取り組みは、同様の取り組みをする団体にも勇気を与えるものだと思われる。

各受賞者の教育に対する熱意をたたえたい。

受賞を逃した中にも優れた指導・活動がうかがえる実践が数多くあった。ただ、子どもや保護者、地域との関わり、子どもの成長や保護者、地域に与えた影響などが資料から十分に読み取れない例が見受けられた。素晴らしい実践であろうと推測されるものの「資料が提出されておらず、審査はできない」と指摘されるケースもあった。推薦者の皆さまには、第三者が客観的に評価しえるような資料や独自性を強調する内容を簡潔にまとめた上であらためて応募をしていただきたい。

（沖縄タイムス社代表取締役会長）

教育のへき地解消へ力 学校教育

玉城睦子さん（60） 伊江村立西小学校教頭



「教育にへき地があってはならない」と話す玉城睦子さん＝伊江村立西小学校

教育に「へき地」をつくらない―。伊江村出身。本島や県外など「都会」との学力差を感じながら学び、幼い頃からの念願だった教職に就いた。35年以上、児童それぞれの良さや個性を輝かせる教育を基本としてきた。「島の子でも、都会の子でも人的・物的環境を整えれば誰でも花開く力を持っている」と強調する。

新人時代から毎日書く学級通信では児童を満遍なく登場させることを心掛ける。「親子の会話が増えるし、全ての子に目を向けるようになる」

30代から年3回、自費で県外の教育者向けの研修に出向いた。人脈をつくり、沖縄へ招いて模範授業などを実施させ、同僚の授業力や児童の学力向上に寄与した。

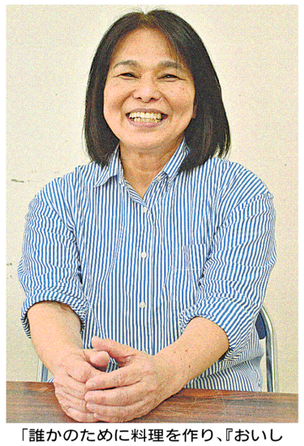
教頭就任後は地域と学校の「つなぎ役」として、地域の人材や素材を活用した授業づくりを支援。3月で定年を迎えるが「退職しても学び続ける人でありたい」とほほ笑んだ。

……

たましろ・むつこ　1959年、伊江村生まれ。中京女子大学家政学部児童学科卒。1992年に名護市立大宮小学校で採用。伊江村立伊江小や西小、那覇市立栄原小などで勤務。2012年に赴任した東村立有銘小中学校から教頭職。

給食向上 食育に使命感

学校教育　根川文枝さん（60）　豊見城市立伊良波小学校栄養教諭 豊見城市立学校給食センター



「誰かのために料理を作り、『おいしかった』と言われる喜びも子どもたちに知ってほしい」と話す根川文枝さん＝豊見城市立学校給食センター

学校給食の現場に携わって31年になる。2007年からの8年間、県学校栄養士会会長も務め、県内の給食向上や食育活動をけん引してきた。

南城市佐敷知念学校給食センター時代には琉球大学と、野菜を増量・減塩した給食を提供する健康改善プロジェクト「チャンプルースタディ」に取り組んだ。

目指すのは「野菜をしっかり食べる子を育てる」こと。20年後、今の子どもたちは働き盛り世代になっている。「給食で学んだことを将来の食生活につなげてくれたら」と願う。

家庭で作られることが少なくなった正統派の琉球料理を給食で提供することに使命感を持つ。家庭や地域と連携した食育実践講座を県内各地で継続している。

栄養教諭の受賞は10年ぶり。「日々忙しいが、どんな子どもを育てたいかという思いをしっかり持ち根気強く頑張ることが自分の生きがいにもなる」と後輩にエールを送った。

……

ねがわ・ふみえ　1959年、読谷村生まれ。二葉栄養専門学校卒業。89年具志頭村（当時）立具志頭小学校に栄養職員として初採用。2008年栄養教諭に任用。15年から豊見城市立伊良波小学校（市立学校給食センター）栄養教諭。07、15年県学校栄養士会会長。

島一丸 地域と学校連携 社会教育

うるま市立津堅小中学校PTCA



津堅小中学校ＰＴＣＡのメンバー＝うるま市津堅島の同校

「ＰＴＣＡ」はＰＴＡにＣｏｍｍｕｎｉｔｙ（地域）を加えた地域住民が教育に携わる仕組みのことだ。津堅小中学校では保護者のほかに自治会、漁協、老人会、企業などがＰＴＣＡを構成している。

「地域は学校のため」「わった一学校」の理念が根付いており、漁協による漁業体験や、戦争体験者による平和学習、地域サークルによる読み聞かせなどを実施している。運動会は島全体で準備し、地域行事には全児童生徒が積極的に参加。その場に親がいなくても、子どもたちには周囲の大人が声掛けするのが伝統だ。

自身も津堅小中学校出身で保護者代表の玉城勝一さん（40）は、「子どものころは地域の近さを当たり前と思っていた」と言い、「親になってありがたさが分かった。大規模校や都市部の学校にはない島の良さだと思う」と話す。今後も島一丸となって子どもたちの教育環境を守る考えだ。